

## 反射率と定性値の一元化による尿定性検査の精度管理

◎藤中 敦士<sup>1)</sup>、赤岩 沙紀<sup>1)</sup>、上田 舞<sup>1)</sup>、中尾 隆之<sup>1)</sup>  
国立大学法人 徳島大学病院<sup>1)</sup>

## 【はじめに】

尿定性検査の精度管理において、試験紙読み取り時に発生する数字（反射率）は、定性値よりも取り扱いやすい。しかし、メーカー許容範囲は定性値に設定されている為、判断値としては定性値が望ましい。今回、我々は、検体検査システム（LIS）上で管理可能で、定性値と反射率を同時評出来る「定性精度管理」を考案した。内部精度管理、トレンド検出および、狭域な許容範囲の設定について、その有用性を検討したので報告する。

## 【対象】

機器は全自動尿分析装置 US-3100RPlus、試験紙はウロペーパー α III、コントロールは US-コントロール栄研 Level I II（すべて栄研化学株式会社）、LIS は HARTLEY（オネスト株式会社）を用いた。定性精度管理は、測定回数を X 軸、反射率を主軸、定性値を第 2 軸で表現し、反射率、定性値、中央値、許容範囲、イベント等が一元管理可能である。

## 【方法】

トレンドは 5 点以上連続した平均値から外れる経時的変化と定義した。試験紙劣化は試験紙を 10 日間連続使用し、コントロール劣化はコントロールの保存条件を遮光と非遮光で分けて 5 日間連続使用した。

## 【結果】

試験紙劣化は、6 日目から CRE の反射率が上昇し、トレンドを認めた。コントロール劣化では非遮光状態のコントロールで、URO の反射率にトレンドを認めた。このトレンドを検出するため、より狭域な許容範囲を設定した。

## 【考察】

尿定性検査の精度管理における、トレンドの検出は定性値よりも反射率が優れていた。しかし反射率単独での管理は、定性値が分からないため、許容範囲の設定が困難であった。定性精度管理は、定性値と反射率を同時に評価出来るため、定性値で許容範囲が確認出来る。同時に反射率でトレンドが検出可能なため、狭域な許容範囲も設定できた。定性値、反射率を一元管理可能な定性精度管理は有用であると思われる。連絡先：088-633-9308